

## 環境学への入り口

野口 美由貴

東京大学大学院 新領域創成科学研究科  
〒277-8563 千葉県柏市柏の葉5-1-5 環境棟461

例年になく暑かった夏も漸く終わり、家の前の道にランドセルの音と談笑する中学生の声が響く朝が繰り返されるようになりました。わが子が小中学生だったころは、このような日常が戻ってくると、ある種の達成感を覚えたように思います。といいますのも、あの楽しくも煩わしい夏休みの自由研究のおかげです。今、インターネットで「夏休みの自由研究」とクリックすると1000件以上ヒットしますが、当時はそれほど多くのサイトはなかったので、クラスで4、5人は同じテーマだったりしました。今年あたりは「リサイクル」をテーマに選んだ子も多かったのではないのでしょうか。子供たちが自由研究などを通して様々な環境問題に興味を持って、その後なかなか学習に結びつかないというのが教育現場の悩みでもあるようです。図1は小中学生を対象に行った環境学習への意欲についてのアンケート結果です<sup>1)</sup>。

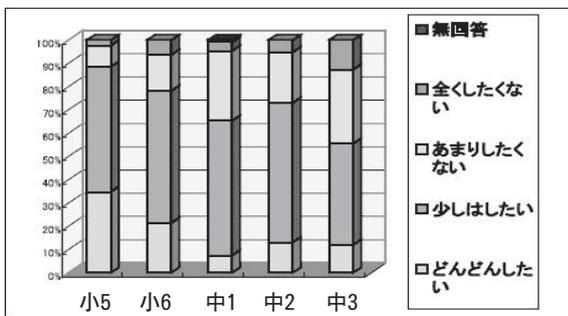


図1 学校での環境保全学習への意欲

学年が進むにつれて環境に関する知識自体は、増加するにもかかわらず、学習意欲がなくなっていくのは何故でしょうか。原因のひとつとして、知識が増えるほど、その複雑さと多様さに圧倒され意欲を失うことがあげられます。また一方では、居住者に居住空間についての情報を提供することで、換気などの行動に変化が現れるという調査結果があります<sup>2)</sup>。これらのことから適切な情報提供とそれを解釈するためのツールが整備されていれば、各人が身の回りの環境について興味をもち、行動をとることが出来るようになるのではないかと考えられます。既往の研究では環境学習の指導法として、まず環境

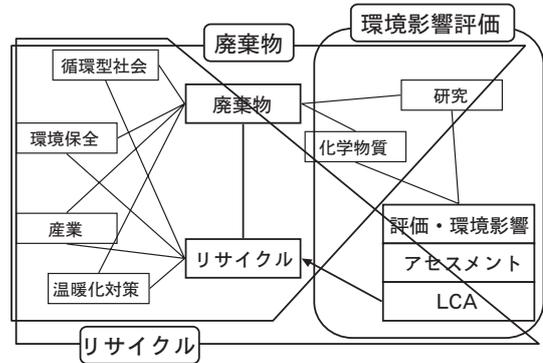


図2 分野間の関係とネットワーク構造

を構成する各分野とその関係を図2のように視覚的に示すことにより、興味を持った問題が環境全体のどこに位置しているのかを認識させ、次に興味をもった分野について学習を深めていく方法を提案しています<sup>3)</sup>。このように1つ1つの環境問題を多角的な視点で見えていくことが今大切なのではないでしょうか。最近話題のバイオエネルギーやリサイクルにしても近視眼的な評価によって社会が動かされているような気がしてなりません。

私たちは大気環境も含め閉ざされた空間の中で暮らしています。そしてその中で起こっている環境問題はこれまで経験したことのないものばかりです。そこでまず、生活の中に溢れている様々な化学製品や科学技術を結集した家電について、その影響や仕組みをもう一段階深めて理解することから始めてはどうでしょうか。そうすることが、私たち自身の健康を守り、環境保護につながるものだと思うのです。そして室内環境学会がそのための情報発信源のひとつになることを期待しています。

- 1) 杉本良一、亀山美佳；子どもの生活に根ざした理科学習に関する研究，地域学論集，2,2，197-228(2005)。
- 2) 常名美貴；情報の認知による空気質改善効果に関する研究，東京大学大学院 新領域創成科学研究科，2005年度 修士論文。
- 3) 中村俊紀；俯瞰型環境教育のための系統的手法の提案，東京大学大学院 新領域創成科学研究科，2005年度 修士論文。